



# 福島学院大学 大学報

VOL. **34**

福島学院大学 大学報  
Fukushima College  
<http://www.fukushima-college.ac.jp>



## 地域を支える 人材育成を目指して

理事長・学長 桜田 葉子

令和五年四月、  
新学部「マネジメント学部  
(地域マネジメント学科)」を

開設いたしました。

令和四年三月二十六日に新学部設置認可申請書を提出し、令和四年八月三十一日、村岡文部科学大臣より認可を頂きました。世界史の歩みを学びにつなげていく「ふくしまならではの学び」を軸に、経営学・経済学・政策学を基盤として、地域社会の変化に柔軟に対応できる人材を育成する、という考えに基づく「設置の趣旨」が文部科学省に認められたものと理解

しております。また、申請書を提出するまでの一年間、「この道しかない」という想いで取り組んできましたが、それまでの三年間の、「公器」の姿を目指し、挑戦する姿勢で推し進めた大学改革の結果、大きな一歩を踏み出すことができましたのだと思っております。

本学に進学する学生の八割は福島県内出身者です。そして大部分の学生が地元に戻り就職しています。

その地元が、福島県特有の避難指示解除区域であれ、全国的に問題となっている少子高齢化・人口減少が進む地域であれ、共通するのは人手不足・人材不足であり、いずれもそこに住む人がそこで住み続けられる地域の創生が課題となっています。

道半ばである福島の再生を支える人材、これからの地域を支える人材を育成することが、課題先進地といわれる福島にある本学の大きな役割と理解し、本学で学ぶ学生には課題の根源を探索し、幅広い視野で解決できる知見を提供しなければならぬと考えています。

困難な状況に直面しても、そこで「生きる力」「生き抜く力」を身につけていただくために、学問的な知識を教授するだけでなくとどまらず、教育環境の充実や実学につなげられる体験など、何を教えるべきか、どのような経験の場が必要か、日々自問自答し続けています。

中央教育審議会大学分科会から「これからの時代の地域における大学の在り方―地方の活性化と地域の中核となる大学の実現―」が出され、大学の教員と大学自体に教育者・研究者の姿に加えて地域貢献する姿が求められています。

本学はこれまでも地域連携センターを中心に地域連携を進めていますが、新学部はこれからの地域を支える人材を育成するという地域貢献に直結する学部となります。既設学部を含め、教育・研究・地域貢献の三つの視点で、「学生第一の大学」「地域になくてはならない大学」、そして地域の中核となる「公器の大学」として、学生や地域の人たちに「選ばれる大学」を目指し、果敢に挑戦し続けてまいります。

理事長・学長

桜田 葉子

## マネジメント学部 地域マネジメント学科

卒業論文・卒業研究

### 専門ゼミナールⅢ

専門応用科目  
(地域経営)  
経済と市民社会  
地域と金融  
地域データ分析  
企業会計  
など21科目

専門応用科目  
(地域政策)  
防災・危機管理政策  
社会保障論  
公共政策論  
情報政策論  
など14科目

### 専門ゼミナールⅡ

地域経営

地域政策

### 専門ゼミナールⅠ

#### ふくしまに学ぶ・応用

メディア危機管理 被災地学習 復興と政治  
東北地域論 地域連携演習Ⅱ 復興とメディア  
企業・行政・エクスターンシップ  
など9科目

#### 専門基礎科目Ⅰ

マネジメント入門  
経営学入門  
簿記・会計入門  
経済統計  
など9科目

#### 専門基礎科目Ⅱ

行政法・地方自治法  
民法 商法  
地域中小企業論  
地方財政学  
など9科目

### 専門教育科目(66科目)

アカデミックリテラシー 人の営みと社会の基礎  
世界をひろげる 体育分野

#### ふくしまに学ぶ・基礎

基礎ゼミナール 福島と復興  
被災地フィールドワーク 地域連携演習Ⅰ など

### 教養教育科目(23科目)



# マネジメント学部 地域マネジメント学科開設

### 学科開設の意図

東日本大震災から12年が経過し、  
復興は着実に進展しているものの、  
被災地域の復興・再生、被災者の生  
活再建、廃炉・処理水対策、風評・  
風化の問題など、依然として深刻で  
複雑な課題が山積する状況にありま  
す。これらの課題を集約するかのよ  
うに表面化しているのが、人口減少  
問題です。  
福島県における避難指示解除区域

令和5年4月、  
マネジメント学部地域マネジ  
メント学科を新たに開設しました。  
経済学、経営学、政策学を軸とした  
学びに加え、地方や被災地で顕在化  
する課題等を学術的に学ぶ同学科の  
カリキュラムや特色などについて  
紹介します。

と少子高齢化・人口減少に伴う地域  
の課題に共通するのはどちらも人手  
不足・人材不足であり、いずれの地  
域もそこに住む人がそこで住み続け  
ることのできる地域の創生が課題と  
なっています。

福島県では依然として若者の流出  
が続く、地域の成長の原動力を失う  
ことにつながりかねません。これら  
の状況に対応するためには、地域に  
おける若者の修学を促進し、地域の  
活力の向上及び持続的発展を図るた  
めの地方創生に資する魅力ある地方

### 学部学科概要

- ◆学部学科名 …… マネジメント学部  
地域マネジメント学科
- ◆開設年月 …… 2023年4月
- ◆学修キャンパス … 福島学院大学宮代キャンパス
- ◆入学定員 …… 90名(収容定員360名)
- ◆学位の名称 …… 学士(マネジメント)  
※入試等についての問い合わせは入学広報課  
(024-553-3253) まで。

### カリキュラムの紹介

大学が必要です。  
そこで、福島学院大学は、福島に  
ある地方私立大学として、地域なら  
ではの強みと魅力を活かし、また実  
効性のある地域貢献を目指し、経営  
学、経済学、政策学を中心とした  
マネジメントを体系的に教育し、持  
続可能な地域の創生と活性化に貢献  
する人材を養成する学部として新た  
に「マネジメント学部」を設置する  
こととしました。

上図に示したように、教育課程は  
「教養教育科目」と「専門教育科目」  
を基本構造として、「ふくしまに学  
ぶ・基礎」では福島の復興の過程や  
復興の課題を学び、地域の行政や企  
業・団体などと連携して地域振興を  
実践的に学修します。「ふくしまに  
学ぶ・応用」においては、「ふくしま」  
をモデルとして震災復興や原発事故  
に関わる地域の課題を各論として講  
じることによって、汎用性のあるマ  
ネジメント能力等を向上させること  
を目指します。

もう一つの大きな特徴は、1年次  
の基礎ゼミナールから2年次以降の  
「専門ゼミナールⅠ～Ⅲ」を通した  
きめ細かな少人数教育です。教員は

## — マネジメント学部 地域マネジメント学科 開設 —



マネジメント学部地域マネジメント学科においては、「ふくしまならではの学び」や「ゼミナール形式の少人数教育」を特色の柱としており、持続可能な地域の創生と活性化をマネジメントできる人材を養成します。本学でこれまでも地域の課題に取り組んできている「地域連携事業」を基盤に、マネジメントの学識、手法を導入し、「社会貢献機能」の拡充をさらに図っていきます。マネジメント学部では、弾力的かつ円滑なキャリア選択が可能となるように、「地域経営」と「地域政策」の2領域を設け、専門ゼミナールの指導教員と相談しながら、学生個々のキャリアプランの実現を目指します。また、学生個別就職面談、学内企業説明会、家族就職説明会、公務員対策ガイダンス等を開催し、学生の夢を支えるサポートを充実してまいります。

副学長・マネジメント学部長・教授 **武田 文男**



ト学部地域マネジメント学科では、地域の課題に関心をよせ、未来に向けて地域に貢献する意識を持つ皆さんを求めています。

福島を経験からの復興再生、地域創生に取り組んでまいります。ポストフクシマの状況下において福島環境、生活文化を反映したまちづくりやコミュニティ形成を考えることにより、流動化する状況に対応し福島の未来を構築できる人材の育成を志向しております。企業はもちろんのこと、自治体や非営利法人での就業、さらには、起業を考える場合も想定したカリキュラムとなっております。また就職に関連する各種試験・検定等については課外講座をもって対応いたします。とくに公務員試験対策講座については当該分野に特化した専門家のサポートを得ることにより、目標の実現をはかってまいります。福島の未来を拓く人材育成に全力を尽くしてまいります。

マネジメント学部 地域マネジメント学科 学科長・教授 **浅野 清彦**



進学後、継続してその意識や思いを発展展開させ、真に地域に貢献する人材の育成と目標の実現への支援を全力で取り組んでまいります。

### 地域マネジメント学科の 特色、学び

ゼミナールを通して学生のキャリアプランを把握し、学生個々の学習状況に応じた科目選択について適切に指導します。学生は将来の進路を見据えて、2年次から地域経営系と地域政策系のいずれのコースを選択するかをしっかりと判断することができ

ます。  
本学科は、経営学、経済学、政策学等の学びを基礎として、福島の復興の知見を学術的に学ぶ「ふくしまならではの学び」による教育を実施することを特色としています。

具体的には、「ふくしまならではの学び」の中で、避難指示解除区域の再生の過程で行われている様々な取り組みを学び、地域の課題を自分事としてとらえる積極性や、人手不足・人材不足によって顕在化する様々な地域の課題解決に必要なマネジメント力を身につけることを目指しています。

### 育成を目指す人物像

学生はマネジメント学部での学び

によって、まず地域の課題を発見・探求し、課題解決のための提案を行います。そこから総合的なマネジメントの技術と能力とによって社会での実践へと展開します。さらに、その地域の課題をモデルとして、普遍的な課題や解決のための方法論を抽出し、確固とした理論と実践を持って、持続可能な地域の創生と活性化をマネジメントすることで持続可能な地域の創生と活性化に貢献できるようにあります。

マネジメント学部では、弾力的かつ円滑なキャリア選択が可能となるように2つのマネジメント領域（地域経営と地域政策）を設け、企業の総合職、専門職や自治体、公益法人、非営利法人、起業家等まで幅広い進路選択が可能です。就職に役立つ各種検定や公務員試験対策講座等のサポートを行い、目標の実現に向けて支援をしていきます。

### どのような生徒に進学を 目指してもらいたいか

福島県内の高等学校では「地域課題探究ワークショップ」を開催し、高校生が地域の課題を自らの視点で発掘し、未来に向けての手法や取り組みを発表しています。マネジメント



## 第2回 外部評価委員会開催

〈開催日時〉 令和4年9月26日  
 〈開催場所〉 宮代キャンパス

本学の自己点検評価を第三者の視点で検証する「外部評価委員会」が開かれました。同委員会では、大学運営や組織運営に関する見識者の方々を委員に委嘱し、本学の教育と研究の質の向上改善に向けた提言をいただきました。

委員会では、桜田葉子理事長・学長が挨拶の中で、「大学資源」「大学運営」「地域貢献」「学生の学修成果」の4つの「見える化」の推進に加え、学修者本位の教育の質向上に向けた教学・事務局改革等、本学の取り組みについて説明。また、令和5年4月に開設したマネジメント学部地域マネジメント学科について紹介しました。

引き続き、沢良子副学長が令和3年度の自己点検評価を報告。報告では、令和2年度の問題点等に触れながら、改善した点や評価理由、将来計画について説明しました。

その後、6名の委員の皆様から貴重なご意見をいただき、桜田理事長・学長をはじめとする本学教職員が、委員の皆様から寄せられた質問等に対応しました。

委員長・鈴木弘行氏  
(福島県立医科大学理事)

2年前に比べ、桜田理事長の下、大学が大きく飛躍していると感じた。今、大学に求められているのは、ガバナンスを発揮しながら透明性を担保すること。もう一つは地域貢献。いかに地域で学び、地域に貢献するか、それをどのように情報発信していくかが大切だ。(新学科の「福島ならではの学び」について) 福島の特長性を挙げるならば、日本社会及び国際社会で内在している様々な課題を先んじて経験していること。そういう意味では、福島で学んだことが将来、日本で普遍的なものとして運用していけるのではないかと考えている。

委員・菅野啓二氏  
(福島県農業協同組合中央会代表理事会長)

中央(首都圏)の大学、地方の大学を比較した場合、どうしても中央の大学に学生が集まりやすい傾向がある。地方の大学が生き残っていくためには、その大学の個性、特徴が大切になってくる。地域に必要とされている人材を育成する計画と目標を定めた教育をしてほしい。地域に根差し、地域の方々が何を求めているかを考え、卒業生が地域に戻った際に、「地域の方々の想いや願いを実現

させたい」という強い思いを持った人材、さらには、しっかりとコミュニケーションが取れる人材を育てていってほしい。

委員・五阿弥宏安氏  
(株式会社福島中央テレビ代表取締役社長)

少子化の中、大学運営は厳しさを増しているが、学生数の増加と(資金収支差額で)黒字転換は素晴らしいことだ。収入増加と経費削減を同時に達成することが望ましいが、収入が伸び悩み、経費を削減することにすれば、教育の質の確保に関わってくる。今後も総合的にバランスの良い収支の生み方を工夫してほしい。また、大学の情報発信という面では、伝える努力と相手に伝わるかはイコールではない。地域連携活動をはじめとした大学の取組をどのようにして大学外に発信していくか、相手に伝わる努力を今まで以上にしていくことが重要だと考えている。

委員・日下部達氏  
(東北電力株式会社執行役員福島支店長)

学生の育成という部分で、地域との連携事業は非常に意味のあることだと思う。我々の会社も地域との共生を大切にしている。前職では採用も担当していたが、いかに地域に貢献できる人材を育てていくかという意味では、会社の存在意義に即した、これから地域と社会に貢献できる人材をいかに育てていくかということが大学側としても非常に重要なミッションだと思う。ぜひ、地域との連携、支援事業については、福島学院大学のメインの取組の一つとして継続してほしい。

委員・渡邊艶子氏  
(福島看護専門学校校長)

(福島学院大学の)雰囲気、良い方向へ変わっていくのを肌で感じている。「開かれた大学」、これが本来の大学の姿だと感じている。もう一つ

は、実践の場を大切にしていることが大きいのではないのかと思っっている。私たち医療に関わる者としては、そこも大切なことと考えている。専門的な学習も大切だが、それより先に「人間とは」というような、学習のほうがかかるかにもしろしい。新設される地域マネジメント学科は、その全てに関わってくる。今後の大学運営は、単科だけでは絶対に生きていけない。地域の方々と手を結び合いながら、地域の生活を見ていってもらえたらありがたい。

委員・大村雅恵氏  
(大和自動車交通株式会社代表取締役社長)

震災、原発事故後、福島県での課題に目を向けて、福島県で生活していく、生きていくということを考えている子どもたちが増えてきている。復興や地域振興などを考える授業を実施していくことや、どのようにして地域に貢献していくかという点で、

福島県の現状を踏まえた大学としての目標が定まっていることは良いことだと思う。新設学科については、福島県の地域に特化し、大震災後の復興の歩みを授業に取り入れるという方向になると、どのエリアに居住する生徒を対象にしていけるか、または地元の方を中心に考えていくのか、学生募集の方向性にも関わってくる話なのではないのかと感じた。



菅野啓二氏



五阿弥宏安氏



桜田葉子  
 理事長・学長



大村雅恵氏



渡邊艶子氏



日下部達氏



鈴木弘行氏

私の専門は児童精神医学です。児童精神医学というのは最近までマイナーな領域で私が児童精神医学を専門にしようとしたときは、専門病院は日本に2箇所しかなく、その一つであった東京都立梅ヶ丘病院と精神科で研修を始めました。日本ではなかなか勉強できるところがなく、アメリカのノースカロライナ大学とロンドンに勉強にいきました。

ノースカロライナ大学ではTEACCHという自閉症支援のシステムの勉強をインターンとして行いました。実際に子どもの発達テストや療育セッションを保護者とスーパーバイザー（指導者）が観察室から見ているなかで行ったり、学校やグループホームなどにコンサルテーションを行うために訪問するという得難い体験でした。ロンドンでは発達障害専門の診断センターで研修しました。発達障害が疑われる子どもと、その保護者にチームで丸1日かけて面談したり発達テストをし、翌日にはまた丸1日かけてレポートを書くという繰り返しでした。ここで学んだのは診断アセスメントをどうするか、どのように保護者や関係者に伝えるかということでした。

科に就職し、さらに発達障害専門の児童精神科クリニックを開業して現在に至ります。医学部のことしか知らなかった自分にとって文系の学部の文化はなにからなまでに目新しく面白かったです。最初に驚いたのは研究室に門限があることで、9時になったら帰るように言われたことです。医学部では門限はないし、帰宅が遅くなると泊まってしまうことも普通でした。なにしろベッドはいっぱいあるので。その後2009年から福島大学に転勤し、福島との縁ができました。これまで行ってきた研究は発達障害の診断、アセスメント、支援についての臨床研究を自身に、触法発達障害の支援、障害児支援機関の外部評価、障害児相談支援における基礎的知識の可視化のための研究などを厚労省と協力して行ってきました。

似性や違いについても検討しています。福島の子どもたちは原発事故と新型コロナの2つの大きな災害を経験しました。原発事故、放射線暴露の心理的影響は現在まで継続しています。コロナ禍において、メディアの取り上げ方や議論の仕方が原発事故の状況と似ています。私たちは原発事故の教訓を生かし、コロナ禍、パンデミックにおける過去や海外の知見を活用したりする必要があります。東日本大震災では、放射線による直接的な身体的影響よりも、放射線被爆の心理的影響や放射線被爆リスクの心理的影響が大きかったのではないのでしょうか。新型コロナウイルスによるパンデミックもメンタルヘルスへの影響が大きいことが知られています。感染者や感染者の家族、支援者は自身が感染したり感染させたりすることへの不安に加えて、感染したことや感染するリスクの高いことを人に知られることを危惧している場合が多いのです。パンデミック状態は社会全体の不安やストレスが増大し、原発事故後の放射線への不安と同様にコロナへの感染の不安は差別や忌避、いじめに繋がっていきます。

リスク認知に誤謬が多いことです。特に放射線情報についての誤解は非常に強いのです。一例をあげれば2017年に三菱総研が東京で行った調査で、福島県の人々に原発事故のために後年に生じる健康障害が生じる可能性が、「非常に高い」と思っている人が15.2%、「ある程度高い」と思っている人が38.3%もいます。医学的にはほぼ完全に否定されている次世代への影響があると信じている人の割合も同じように高いのです。このような誤解が福島県の差別や忌避だけでなく子どもへのいじめが生じる要因にもなっていると思います。

このような誤りを訂正するためにも正確なデータが必要です。そのため震災後から現在まで原発事故やコロナ禍などに影響を与えるかを浜通りで調査しています。原発事故のあとさまざまな憶測やデマが流れていました。環境変化の影響を調査するためには正確な情報が必要です。正確な情報を得るのは簡単なことではなく、行政との調整や人手、時間、お金が必要です。これからも可能な限り、調査研究を続けていきたいと思っています。



教授  
内山 登紀夫

1956年生まれ。三重県尾鷲市出身  
【学歴】順天堂大学医学部卒、博士（順天堂大学、医学）  
【所属学会】日本児童青年期精神医学会、日本LD学会、発達障害学会、日本精神神経学会など  
【職歴】  
1983年 順天堂大学医学部卒業。同年順天堂大学医学部精神医学講座入局。  
1988年 東京都立梅ヶ丘病院精神科  
1994年 ノースカロライナ大学医学部精神科留学。  
1997-1998年 The Centre for Social Communication Disorders (現 Lorna Wing Centre)  
1999年 大妻女子大学人間関係学部助教授  
2000年 よこはま発達クリニックを開設  
2005年 大妻女子大学人間関係学部（人間福祉学部）・同大学院教授（臨床心理学）  
2009年 福島大学人間文化発達学類教授  
2014年4月 福島大学子どものメンタルヘルス支援事業推進室兼任教授  
2016年4月 大正大学社会心理学部臨床心理学科教授就任  
2021年4月 ふくしま子どものこころのケアセンター顧問  
2022年4月 福島学院大学教授



東日本大震災・原発事故と  
福島にある大学の役割

二〇一三年（令和五年）は、東日本大震災・原発事故から十二年目になります。事故原因について、東京電力福島原子力発電所事故調査委員会『国会事故調報告書』（徳間書店、二〇一二年）には、直接の原因は地震・津波、根本的原因是に生命を守るという責任感の欠如と記されました。では福島にある大学の役割は何か。その問いに対して、私自身は、生命を基本とする教育の推進と答えたいと思います。生命を基本とする教育とは、生命に及ぼす影響に配慮し、よりよい生活環境を創造する人間の育成を意味しています。生活環境には自然環境と人為的環境を含めました。原点は生命、最終的な課題は多様な現場での実践と表現することもできます。

自然と対立する造形教育ではなく自然と馴染む造形教育

原発は人間がつくったものです。それではものをつくることにかかわって、生命を基本とする教育を具現化するためには、どのような教育を目指せばいいのでしょうか。端的に言えば、自然と対立する造形教育ではなく自然と馴染む造形教育を目指すということです。人間は自然の一部であり、自然

に支えられてこそ生きることができからです。

こうした教育の方向は、著書『次世代ものづくり教育研究―日本人は責任の問題をどう解決するのか―』（佐藤昌彦、学術研究出版、二〇一九）のなかで提起しました。本書は文部科学省の令和元年度（二〇一九年度）科学研究費助成事業科学研究費補助金（研究成果公開促進費・課題番号19015214）の助成を受けて出版されたものです。

原点（手づくり）から最先端（AIやIoTなど）まで、ものをつくる行為全体（原発も含む）の根底には人間の責任を位置づけ、造形性・創造性とともに人間性をいっそう重視しました。

科学・技術・芸術の連携、そして一人ずつの事例から量産の事例まで、ものできるトータルな構造を視野に入れていきます。保育所、幼稚園、認定こども園、小学校、中学校、高等学校、大学など、教育や保育の現場でのものをつくる行為全体へも眼差しを向けました。

大学教育の現場での実践―授業における三つの視点―

造形に関する授業を行う際には以下の三つの視点を踏まえています。

■**指針**：何を大切に考えて子どもの前に立つのか。学生一人一人が自問自答し、自らの指針をもつことがで

きるように、生命を基本とする教育の要（かなめ）となる思想やものをつくる教育に関する歴史及び世界の状況について学びます。

「テキスト」復刻集成 宮脇理の世界「ミライへの造形教育思考―アーキストの視線で見る―」（監修・資料提供：宮脇理、編集：佐藤昌彦、学術研究出版、二〇二二）

■**規範**：自然とのかかわりを大切にしてきた伝統的なものづくりについて学びます。その事例の一つがアイヌの人々に受け継がれてきたものづくりです。たとえば、ヤラスという樹皮の鍋をつくるために材料を採取する際には「ヤラスをつくるために材料を少しただきます」と感謝の言葉を述べ、木が枯れてしまうことのないように、全体の三分の一だけの樹皮を採取します。

「テキスト」次世代ものづくり教育研究―日本人は責任の問題をどう解決するのか―（著者：佐藤昌彦、学術研究出版、二〇一九）

■**創造モデル**：自然に負担をかけないように、有り余るほどの材料ではなく、少ない材料で（必要とする分だけの材料で）多様な発想を生み出す創造体験を大切にしました。材料は自然の恵み・自然の生命と考えたからです。そうした創造体験の積み重ねは先に述べた「生命に及ぼす影響に配慮し、よりよい生活環境を創造する人間の育成」につながるものと考えます。

なお創造モデルで重視した観点は次

の四つです。第一は「基本形から発展形へ」。第二は「発想から形へ、そして形から発想へ（双方向共存）」。第三は「価値観の形成（創造モデルの中心軸として）」。第四は「ものづくりの責任」。

「テキスト」紙による造形―つくりかた―の思い浮かばない、どうすればいいの？」（著者：佐藤昌彦、学術研究出版、二〇二二）

令和五年度 学生作品展

「ようこそ、あそびの国へ!! オープン!! 遊ぶ・飾る・飾る、いろいろな教材大集合!!」の開催

令和五年度は、学生の作品を「ようこそ、あそびの国へ!! オープン!! 遊ぶ・飾る、いろいろな教材大集合!!」として展示したいと考えています。主な教材の事例を以下に示しました。

一枚の紙でつくる・見たこともないような顔、いろんなオニがあつまつた、鍋つかみの大変身、身近な材料を活用してつくる・おしゃべりの達人、的当て遊び・モンスターアタック、どこまで高くつめるかな・紙コップ遊び、すべってどこまでいけるかな・コースター遊び、新種の魚大発見!! 魚つり遊び、シャクトリムシのような動きで斜面を転がる・コロコロりん。

有り余るほどの材料ではなく、少ない材料で多様な発想を生み出す創造体験を振り返ることによって、その背景にある考え方を再確認したいと思えます。



教授  
佐藤 昌彦

1955 年生まれ。福島県福島市出身  
【学 歴】兵庫教育大学：博士（学校教育学）、上越教育大学：教育学修士、福島大学：教育学士  
【所属学会】美術科教育学会、大学美術教育学会、基礎造形学会等  
【職 歴】北海道教育大学名誉教授、北海道教育大学附属札幌中学校：校長、北海道教育大学キャリアセンター札幌校センター長、北海道教育大学：教授（札幌キャンパス・岩見沢キャンパス・函館キャンパスにおいて学部及び大学院の授業を担当する）、福島県公立小学校教諭

New **よい仕事おこしフェア実行委員会**

協定締結日 令和5年2月24日

全国の信用金庫で組織する「よい仕事おこしフェア実行委員会（事務局：城南信用金庫）」と包括的連携に関する協定を締結しました。同実行委員会と福島県内の教育機関が協定を結ぶのは初めてとなります。

協定は、信用金庫のネットワークを活用した地域経済の活性化に関することや、地域の魅力発信及び風評払拭・風化防止、次世代を担う人材の育成などを目的としています。今後は、全国の信用金庫のネットワークと本学がつながり、本学の地域連携事業をベースとした商品開発や企業とのマッチング、情報発信、人材育成等、地域の創生と活性化により一層取り組んでいきます。

この度の協定締結は、福島民報社が若者を全国の地域づくり先進地に派遣する「ふくしま復興大使」の活動で、短期大学部情報ビジネス学科の学生が活動に



参加したことがきっかけに実現しました。福島駅前キャンパスで行われた締結式には、城南信用金庫の川本恭治理事長と福島信用金庫の樋口郁雄理事長、本学の桜田葉子学長が出席し、協定書を交わしました。福島民報社の芳見弘一社長に同席いただきました。

New **ふくしま三大ブランド鶏推進協議会**

協定締結日 令和4年9月9日

福島三大鶏の会津地鶏（会津地鶏みしまや）、川俣シャモ（川俣町農業振興公社）、伊達鶏（伊達物産）のさらなる消費拡大に向けて、ふくしま三大ブランド鶏推進協議会と相互連携に関する協定を締結しました。

令和3年度から福島三大鶏PRプロジェクトに学生が参加し、ワークショップを通してPR施策を考案するなど、連携活動を展開してきました。協定締結後の令和4年10月には、福島市で開催された福島三大鶏の試食会に学生が参加しました。来場した旅館の料理長や飲食店経営者の方々に、三大鶏の丸焼きやメンチカツなどを提供し、それぞれの鶏肉の魅力を発信しました。今後は、同協議会と本学がメニューの開発提案などで連携した取組みを進め、三大鶏の認知度向上を図っていく方針です。

福島駅前キャンパスで行われた締結式では、同協議



会長を務める会津地鶏みしまやの小平和広社長と桜田葉子理事長・学長が協定を交わしました。式には、伊達物産の清水建志社長、川俣町農業振興公社の渡邊良一社長、同協議会事務局を務める株式会社第一印刷の古川幸治社長が同席しました。

ACTIVITY REPORT

福島学院大学

地域連携センター  
活動報告

令和4年度は、新たに3団体との連携協定を締結しました

本学の地域連携拠点「地域連携センター」は平成31年度の設置以来、多くの企業・団体との協働による約200の事業を展開してきました。令和4年度は新たに3団体と連携協定を締結しました。今後も、「地域に根差し、地域になくてはならない大学」を掲げ、多様な連携事業を通じた地域貢献と大学資源の“見える化”を図っていきます。

New **福島県教育委員会**

協定締結日 令和4年11月28日



幼児教育のさらなる充実に向けて、福島県教育委員会と連携協力に関する協定を締結しました。幼稚園教諭・保育士養成機関である本学の教育・研究の知見を生かして、福島県教育委員会との連携した取組を進めていきます。

主な内容は、幼児教育の質向上を目指す取組をはじめ、幼児教育における諸課題への対応や、幼小教育の接続性強化、保育者等の養成・研修など。本学は、福祉心理学科や心理臨床相談センターを有しており、

児童心理に関する研究実績を持つ研究者が在籍していることから、同センターと連携した研修会や宮代キャンパス敷地内にある認定こども園を活用した実践的な研修の開催、特別な支援を要する幼児に関する福祉心理学科、同センターと連携した支援、実態調査研究などに、「研修、支援、研究」の3つの視点で連携して取り組んでいく方針です。

締結式は福島県庁で執り行われ、大沼博文県教育長と桜田葉子学長が協定書を交わしました。



## 株式会社いちい

締結日 令和2年12月

令和3年度から、情報ビジネス学科の授業「経営概論」で連携授業を実施しています。授業では、いちいの役員、社員の方々に講師にお招きし、地元密着スーパーの経営などについてお話いただきました。また、いちい本社や店舗の見学も実施し、経営の裏側や企業の社会貢献事業などについて学生が学びを深めました。



## NPO法人結倶楽部

締結日 令和2年7月

福島市飯野町で結倶楽部が栽培している巨大ニンニク「UFOのエレphantガーリック」のブランド化に取り組んでいます。学生が種植え、収穫をはじめ、商談会や販売会等を実施。ニンニクは、福島市内のスーパー「いちい」や郡山市のうすい百貨店で販売されるなど、活動4年目となった令和4年度、本格的な流通・販売が実現しました。



## 福島ユナイテッドFC

締結日 令和3年12月

福島学院大学認定こども園で、福島ユナイテッドFCのアカデミースタッフの方を講師に招いた「運動遊び」を年20回程度実施しました。年長園児が遊びを通して走ったり跳ねたりして体を動かしたほか、ボールを使った運動などに挑戦。楽しみながら基本的な体の動かし方を学びました。また、本学の「体育実技(サッカー)」は、福島ユナイテッドFCのスタッフの方に授業を担当していただいています。



## 飯坂温泉観光協会

締結日 令和元年6月

飯坂温泉PRキャラクター「温泉むすめ 飯坂真尋ちゃん」のプロジェクトに参画しています。令和4年度は、真尋ちゃんの声を担当する声優の吉岡菜祐さんを起用した飯坂温泉のPR動画の企画立案に学生が協力しました。動画は同協会の公式ツイッターで公開しています。また、吉岡さんらによるトークショーの運営やグッズ制作などにも取り組みました。



## 土湯温泉観光協会

締結日 平成28年2月

情報ビジネス学科「イベントプランニング」の授業の一環として、土湯温泉の夏祭りの企画運営に携わっています。学生が製作したリヤカーを使用して、土湯温泉の商品の移動販売を行う「リヤカーカフェ」をはじめ、同温泉名物のこけしを活用した「こけし風鈴」を制作するワークショップや水をテーマとした縁日屋台など、学生考案のイベントが開かれました。土湯温泉の伝統行事「こっこ」にも学生が企画運営に協力しました。



## 福島県立医科大学

締結日 令和2年1月

福島県立医科大学と福島民友新聞社が主催する「減塩サミット」で、食物栄養学科が減塩レシピの考案等で協力しています。令和4年度も学生が工夫を凝らした減塩料理を新聞紙面等で発信しました。また、同年度12月には、福島県立医科大学の竹之下誠一理事長・学長と鈴木弘行理事を講師にお招きした人材寄付講座を開講しました。



## 福島信用金庫

締結日 令和2年12月

福島信用金庫、道の駅伊達の郷りょうぜんとコラボし、伊達地域の6次化商品開発の仕組みづくりに取り組む「だてな美食on-line 食ping プロジェクト」に参画しています。令和4年3月、学生のアイデアが反映された8商品がお披露目となり、同道の駅での販売のほか、同年7月から商品の通信販売が開始となりました。引き続き、本学が販売促進、販路開拓に協力していきます。



## 福島県浪江町

締結日 令和3年3月

これまで、無印良品(株式会社良品計画)の協力を得て、浪江町との連携授業を実施してきました。令和2年度の連携授業で、学生が浪江町の酒粕を使用した商品を考案。試行錯誤の末、令和4年度に「酒粕クッキー」が完成しました。初回生産分の酒粕クッキーは東京都で開催された浪江町物産展で販売されました。また、賑わい創出を目指し、令和3年度から始まったコスモス畑整備にも継続して取り組みました。



## 福島地域酒米研究会

締結日 令和3年4月

福島市産酒米を使用した日本酒のブランディングに取り組んでいます。2021年度に引き続き、福島市で夏と冬の年2回開催されている日本酒販売会では、学生が同研究会会員の皆様とともに販促や売り場づくりなどに協力したほか、チラシなども制作。福島市で栽培された酒米で醸造した日本酒を販売、PRしました。



第2回 令和4年9月6日

講師：合同会社MARBLiNG共同代表 松本奈々氏、矢野淳氏  
ファシリテーター：元朝日新聞記者、本学客員研究員 菅沼栄一郎氏

合同会社MARBLiNG(マープリング)を設立し、飯館村での復興、地域づくりに取り組む同社共同代表の松本さんと矢野さんの2名を講師に、元朝日新聞記者で本学客員研究員でもある菅沼栄一郎さんをファシリテーターに迎えて講座を開催しました。講演では松本さんと矢野さんが進める交流拠点「囃(ズット)倉庫」の紹介などを踏まえ、人との繋がりを通じた地域づくりの重要性についてお話しいただきました。



菅沼栄一郎氏

(右から)松本奈々氏、矢野淳氏

第3回 令和4年12月13日

講師：福島県立医科大学 竹之下誠一理事長・学長  
講師：福島県立医科大学 鈴木弘行理事

第1部では竹之下理事長・学長が『「変化を進化へ」～建学150年福島医大の挑戦～』をテーマに、福島県立医科大学の歴史や東日本大震災後の活動、医療人材の育成を通じた地域活性化の取組などについて講話してくださいました。また、第2部では鈴木理事が『「福島医大が実践する最新のがん治療」～福島医大はこう治す』と題して、ロボット治療と免疫療法の新たながん治療などについて紹介してくださいました。



(右から)竹之下誠一氏、桜田葉子学長、鈴木弘行氏

第1回 令和4年7月26日

講師：福島県警察 児嶋洋平本部長

児嶋本部長は「福島県警の活動と治安情勢」と題して講演し、福島県警察の組織の仕組みをはじめ、福島県の犯罪(刑法犯認知件数)が大幅な減少傾向にある中、なりすまし詐欺の犯罪件数が減少していない現状などについて具体的にお話しされたほか、福島県警察がなりすまし詐欺や地域防犯などに関する情報を配信している「PORICEメールふくしま」についても紹介してくださいました。



児嶋洋平氏



会場の様子

人材寄付講座

人材寄付講座は地域の振興・活性化に寄与することを目的に地元企業や団体、官公庁などと連携し、各分野のスペシャリストを講師にお招きする一般市民向けの公開講座で、福島駅前キャンパスの開館以来開催しており、令和4年度は福島駅前キャンパスで全3回の講座を開講しました。令和5年度も引き続き、講座を開講していく予定です。



## 読み聞かせプロジェクト

本学は、令和3年度開設の「こども図書館」を核とした「読み聞かせプロジェクト」を展開しています。同プロジェクトは、こども図書館を活用した様々な活動を通して、保育者を目指す学生の感性を磨くと共に、“言葉の表現力”“コミュニケーション能力”の向上を図ることを目的としています。また、子どもたちの豊かな感性と知的好奇心を育むことを目指し、福島学院大学認定こども園や近隣小学校での活動も実施。子どもたちの読書活動の推進にも寄与していきたいと考えています。令和4年度の活動を紹介します。



### 園児と 交流しながら 読み聞かせ

こども図書館開設以降、福祉学部こども学科の「保育実習指導」、短期大学部保育学科の「会話演習」などの授業で、同図書館を活用した読み聞かせの授業を行っています。授

業では、認定こども園の園児を図書館に招き、学生が園児と交流しながら園児への実践的な絵本の読み聞かせに取り組んでいます。また、授業以外では「学生サポーター」として

学生が絵本の貸出、整理等で図書館の運営補助を担っているほか、実習に向けた絵本の教材研究等にも取り組んでいます。

### 地域の 小学校などでも 活動

令和4年9月から、本学宮代キャンパスの近隣にある福島市立瀬上小学校で、同校の1、2、3年生を対象とした絵本の読み聞かせを実施しています。活動には、こども学科の学生が参加。活動を通して、学生が絵本の見せ方や読み方などを深く考える機会となり、読み聞かせに対する子どもたちの反応を肌で感じることでできる貴重な体験となっています。令和5年度も同校などで活動を継続していく方針です。また、保育学科の学生は実際の保育・幼児教育の現場である認定こども園での読み

聞かせに臨みました。

### 研修・視察に こども図書館を 開放

令和4年7月に福島地区学校図書館研究会の研修の一環として、福島市、川俣町の小中学校の図書担当教員約50名の皆様が本学を訪れ、こども図書館を視察しました。視察では、絵本が並ぶ2階建ての館内を自由に観覧していただきました。視察に先立ち、認定こども園の二谷京子園長が、研修に参加した皆様に同図書館の概要や読み聞かせプロジェクトについて説明しました。

### 絵本の貸出

毎週火、木曜日の14時～17時には、認定こども園の園児やその保護者、

そして地域の皆様向けに絵本の貸出を行っています。また、館内でゆっくりと絵本を楽しむこともできます。こども図書館は、地域の読み聞かせや子育て支援の拠点を目指すとともに、絵本のさらなる充実を図るなどして図書館の魅力づくりを進め、地域の皆様が絵本に親しむ場の創出に取り組んでいきます。

令和5年度は、「読み聞かせプロジェクト」をこども学科・保育学科の授業に位置づけ、こども図書館の

蔵書の充実、学生の読み聞かせの技術の向上、読み聞かせ実施施設の拡大などをおし、さらに充実を図っていく予定です。

### こども図書館利用についてのお問い合わせ

福島学院大学認定こども園  
TEL 024-553-3223





同窓会事業

第1回

# 卒業生座談会

■ 日時：2022年8月30日 ■



(前列左から)柴田大輔学生部長、桜田葉子学長、船山さん、桑折さん、渡辺会長 (後列)食物栄養学科教員

各分野の第一線で活躍する本学の卒業生をパネリストに招く「卒業生座談会」が、令和4年度、初めて開催されました。同座談会は、コロナ禍の大学祭開催中止などを受けて、本学同窓会が学生のキャリア教育や大学広報を目的に企画した事業です。

今回の座談会、駅弁「牛肉どまん中」で知られる新杵屋の代表取締役社長の船山百栄さん(秘書科卒)、人気スープ専門店「スープストックトーキョー」のメニュー開発を手掛けるフードプランナー・料理家の桑折敦子さん(食物栄養学科卒)がパネリストを務め、コロナ禍における食の変化などについてお話しいただきました。ファシリテータを渡辺あゆ美同窓会長が務めました。

## 支援品寄贈

令和4年度は協定締結先を含む企業・団体の皆様から多くの支援品をご寄贈いただきました。皆様の温かいご支援に感謝申し上げます。



サンペンディング福島様から絵本の寄贈



NPO法人ハート・オブ・ゴールド福島クラブ様から生理用品の寄贈



佐藤秀美氏から絵本の寄贈



NPO法人結倶楽部様からお米の寄贈

## メディア懇談会

福島学院大学が目指す“大学の見える化”を図るため、報道関係者の皆さまを本学にお招きし、大学での取り組みや本学教員の研究を紹介させていただいております。令和4年度は、中止の回を除き、全9回のメディア懇談会を開催いたしました。

令和4年10月28日

第6回



令和4年11月25日

第7回



令和5年1月27日

第8回



令和5年2月24日

第9回



令和5年3月24日

第10回



令和4年4月22日

第1回



令和4年5月27日

第2回



令和4年6月24日

第3回



令和4年9月30日

第5回





福島復興大使に  
本学学生2名が就任

福島民報社が選ぶ「ふくしま復興大使」に、情報ビジネス学科の今野茉奈さん(当時2年)、狩野篤輝(当時1年)が選ばれました。今野さんと狩野さんは、福島市飯野町で栽培されている「エレファントガーリック」のブランド化に携わっていることから、ニンニク生産の盛んな青森県田子町を訪問。先進地での取り組みを視察しました。



心理学検定特1級  
本学初の取得

福祉心理学の進藤有紗さん(当時4年)が、日本心理学諸学会連合が認定する唯一の検定「心理学検定」で、最高難易度の特1級に合格しました。進藤さんが本学で初めての特1級取得者となります。検定では、心理学の原理・研究法・歴史、神経・生理など10科目についての試験が行われ、全科目の合格が取得要件となっています。



2022年12月14日、男子児童を保護したとして、いずれもこども学科当時1年の八島梨那さん、大山小晴さんと同学科の鈴木翔太講師の3人が福島北警察署から署長感謝状を受けました。同年11月24日夕方、宮代キャンパス周辺の道路で、立きながら裸足で走る男子児童を目撃した八島さんと大山さん。一時、男児を見失いましたが、鈴木講師や警察と連携し大学周辺を捜索、その後男子児童を無事に保護しました。

人命救助に貢献した  
学生らに署長感謝状



福祉心理学の大久保蓮さん(当時4年)の「夜を失う」が、学生対象の最高賞に当たる東北学院大学賞を受賞しました。同作品は、大学進学を機に東京に出た若者が、福島に帰省、小学校の同級生に再会する物語で、震災から10年を過ぎても心に傷をおいながら生活し続ける様子が緻密な文章で描かれています。

第5回  
仙台短編文学賞で  
学生最高賞を受賞

のぎく祭  
3年ぶりに開催

新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、2020年度から中止となっていた本学の文化祭「のぎく祭」が2022年10月10日、学内者限定で3年ぶりに開催されました。お笑いステージや各学科の緑日、キャンパス周遊型謎解きゲーム、豪華景品が当たる大抽選会などが催され、大いに盛り上がりを見せました。



令和4年度より  
「Nutrition Cafe福島」を  
開催

食や栄養をテーマにしたサイエンスカフェ「Nutrition Cafe福島」を開催しました。開催初年度の令和4年度は、レシピ開発や加工食品、遺伝子、食中毒など様々な分野で活躍するゲストを招き、全5回開催。学生と地域の方々が意見交換しながら専門知識を高める場を創出しました。同イベントのほか、食育ワークショップ等も開催されました。



ふくしま産業賞で  
学生奨励賞を受賞

地域活性化等に貢献する企業活動を表彰する「ふくしま産業賞(福島民報社主催)」学生部門の学生奨励賞に、情報ビジネス学科の学生らがピアスタンド「イエローピアワークス文化通り店」の内装を手掛けた事業が選ばれました。ピアスタンドは、農業生産法人カトウファームの直営。依頼を受け、学生らが約半年を掛けてお店を手作りしました。



利用額の一部が福島県の復興や県産品の風評払拭の支援に活用されるクレジットカード「Fukurum(フクラム)カード」の新デザインに、短期大学部情報ビジネス学科2年(当時)の鈴木晃一郎さんのデザインが採用されました。同カード事業の10周年を記念したデザイン公募で、鈴木さんのデザインが最優秀賞(県知事賞)を受賞。また、いずれも同学科2年(当時)の吉田涼太さん、佐藤映里さんのデザインが優秀賞(観光交流局長)を受賞しました。

福島県応援  
クレジットカードに  
学生のデザイン採用



国産肉を使用した料理のアイデア等を競う「2022ミートデリカコンテスト県大会」で、食物栄養学科の高橋樹璃さん(当時1年)が考案した「簡単ミニマンガ肉」が最優秀賞に選ばれました。コンテストでは、「街のお肉屋さんで販売する新しいお惣菜」をテーマに、独創性や普及性などの項目で審査されました。

ミートデリカコンテスト  
県大会で最優秀賞



ACCREDITED  
2016

本学短期大学部は平成28年度  
(財)短期大学基準協会による  
第三者評価の結果、適格と認  
定されました。



本大学及び大学院は平成22年度  
(財)日本高等教育評価機構から  
高い評価をいただきました。



SUSTAINABLE  
DEVELOPMENT  
GOALS

福島学院大学は持続可能な開発目標(SDGs)を  
支援しています。

# 福島学院大学大学報

FUKUSHIMA COLLEGE  
<http://www.fukushima-college.ac.jp>

VOL. **34**

発行 福島学院大学

〒960-0181 福島県福島市宮代字乳見池1-1  
TEL 024-553-3221 FAX 024-553-3222  
©2020 Fukushima College.

編集 福島学院大学 入学広報課  
発行日 令和5年4月28日



ホームページ



YouTube



Twitter



Instagram